
東方反幻想

While(1)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方反幻想

【Nコード】

N3038BA

【作者名】

While(1)

【あらすじ】

なんか、みんなが寄ってくる。悪い気はしないが、不思議ではある。

何の魅力もない、といったら嘘になるかもしれないが、みんなが惹かれるような魅力を、私は持ち合わせていない。

本当、どうしてみんな私に興味を示すんだろうか。

春先の雪（前書き）

本作品は、東方projectに登場するキャラクターがことごとく性転換しています。嫌悪感を抱かれる方はブラウザバックを。

春先の雪

眩い朝の陽ざしを受けながら微睡んでいると、ゆさゆさと体を揺さぶられる。

眠りを阻害しようとしているそれは、しかし一定のリズムを刻んでいるため私をより深い眠りへと誘っていく。

「……き……おき……」

おぼろげに聞こえてくるのは同居人の声。きつと、ムスツとしているのだろう。

「……あと、もうちょっと……」

いうと、揺さぶりが収まる。見逃してくれたのかもしれない。ふふん、相変わらず甘い。

と、油断していたのが悪かったのだろうか。ガバツと布団を剥がれた。

「——シャンハイッ！」

日本の海の間こうにある大国の都市名を叫びながら飛び起きる。すぐさま目標の位置を特定し、できる限りの速さで取り返す。

「……人形がどうかしたのか？」

と、首をかしげながらいったのは、紅白の御子服に身を包んだ同居人。真冬だというのに、夏と来ているものが変わらないとはどういうことだ。

シャンハイと聞いて思い浮かべるのが人形とは……。確かに、そんな名前の人形いたけどさ。

「うー……別になんでもないよ」

いいながら、先ほど奪ったもの……布団に包まるが、布団は生ぬるく不快な温度となっていた。

さっきまでの暖かさがまるで嘘みたいだ。

「それで、まだ朝なのになんで起こしたのさ」

「もう朝だけだな。今から異変解決に出るから、留守番してて」

「……ああ、やっと気づいたの」
ちなみに今は春先である。しかし外は雪が降っている。紛れもなく異変である。

気づいてたならいつてくれればよかったのに。なんて愚痴る同居人を余所に、タンスから防寒具——去年作成した手編みのマフラー——を取り出し、首につけてやる。

「風邪ひかないようにね。行つてらっしゃい」

欠伸を噛み殺しながら手を振る。

「お、おう……」

同居人は顔をうつすら赤く染め、それを隠すように踵を返す。結構な速度で飛び去っていく後姿を見届けてから、開けっ放しにしてあるタンスに向かう。

「着替えて、朝ご飯でも食べよ」

作つてあるのかどうかしらないのだが。

同居人が作つておいてくれたご飯を食べ終えてから、手袋をつけて縁側から外に出る。

足袋が濡れないように足の高い下駄を履き、黒の番傘を肩にかけてしゃがみこむ。

見事な積雪。純白のそれは穢れがなく、砂糖をかけて食べればおいしそうだ。塩は冷たくなるから却下。

「さすがに食べないけど」

冬に冷たいものを食べる。それはそれで風情があるけれども、さすがに雪を食べようとは思わない。お腹こわすし。

眺めているだけではなんなので、小さめのだるまを作つてみる。顔のないだるま。

頭が大きかったり、絶妙な大きさだったりするのはご愛嬌。暇つぶしなんだから適当である。

「なにやつてるんだ？」

不意に上から声が降り注ぐ。見上げると、番傘が邪魔をして声の主が見えない。見えているのは下半身くらい。

雪で少しだけ重くなった番傘を振り、立ち上がると、そこには杖を手にした友人の姿が。

「おはよう。満坤」

まぶしいイケメンスマイルを向けられる。金髪が光を反射し、より一層その笑顔を引き立たせているような気がする。

幻想郷にはたくさん美形がいるものの、こいつはなんというか、軽薄そうな美形だ。女遊びが酷そう。

ま、偏見なのだが。そもそもこいつは今まで異性と交際をしたことがないだろうし。実際初心だし。

「……あんまりそっちの名前で呼ばないでほしいな……」

苦言を呈すと、そいつ……霧雨真理沙はそうかい、と気にした様子もなく縁側に腰掛ける。

「零無は？」

「異変解決に行ったよ」

教えると、少しだけ目を見開いてニヤリと笑う。

「つまり、二人つきりってわけだ」

まあ、そうだ。しかしそれがどうかしたのだろうか。恋人同士ならやることやるのだろうが、私と真理沙は生憎とそういった関係ではない。

暇なら異変解決に行つてこればいいのに。

「別に、暇つてわけじゃないさ。異変解決の方も行つてみるつもりだし。夜月の顔を見に來ただけさ」

「そう、ならさっさと行つてきなよ」

「……それ、さすがに酷くないか？」

そうかもしれない。が、意味が分からないことをいう輩にはこれでいいのだ。

「意味が分からないって……」

がつくりと肩を落とす真理沙。そういうことは霖さんにいえないのに。

どうして私なんかにいうのだから。それがわからないよ。

「待て。そこでどうして霖が出てくる」

「別に？」

いつてやると、真理沙は顔をほんのり朱に染める。真理沙が霖さんに好意を抱いていることくらいお見通しなのだよ。

もつとも、その行為は親に向けるようなものなんだろうけど。

もういい、とにやにやする私から目をそらすと杖にまたがりゆっくりと宙に浮き始める。

「帰ってきたら暖かいものくらいは作ってあげるよ」

驚いた表情を向けられる。……別に、異変解決に尽力したことを労うだけなんだけど。そんなにおかしいことかな。

「いやおかしくないが……。なんというか、波があるな」

「波？」

「気分の波」

ああ、うん。たしかにそれはあるかもしれない。気分の波が一定じゃないってことだね。わかりやすくいうと情緒不安定。

「まあいいや。それより、さっきのことは本当だな？」

「うん。スープくらいなら」

忘れるなよ。そう言い残して真理沙は飛んで行った。
なんというか……ちょろい。

「こんにちは」

引き続き雪遊びをしていると、執事が現れた。

銀髪である。銀髪。幻想郷において金髪は珍しくないが、銀髪と
いうのは珍しい気がする。

「こんにちは。どうしたんです？」

聞くと、執事……十六夜朔夜は私に近づき、背中と太もものあたりに手をやるとお姫様抱っこをする。

「すげー。執事すげー。何がすごいって手馴れてるところが凄いよ、うん。」

「動じないんですね」

「え？ あ、はい。そういう気分じゃないですもん。ところで、仕事ですか？」

敬語を使っているあたり、仕事なんだろう。わがままお坊ちゃんのご命令。

「はい。レミリア様があなたを連れて来い、と」

レミリアか。自分でこればいいのに。まあ、完全に日の光がないというわけじゃないから、出不精のあいっはこれ幸いと執事に命令したのだろう。

私は留守番があるんだけどな……。いったところで意味はない、か。

「じゃあ、行きましようか。あ、番傘取ってください」

そこまでいうと、一瞬にして景色が変わる。神社とは打って変わり、そこには紅い館があった。

朔夜に下ろしてもらい、そのまま番傘を受け取る。

「それでは、ご案内します」

歩き出す朔夜の後ろを追いかける。さて、我儘ぼっちゃんは何の用かな？

トランプ

「それで、何をするのさ」

そういったのは、私ではなく私の膝に座る金髪の少年。

おかしな形をした七色の羽を嬉しそうに動かしながら、目の前の兄に語りかけている。

「……フラン。お前はもう少し礼儀をだな」

「あーあー、きーこーえーなーいー」

しかめっ面をしていう少年の兄、レミア・スカーレット。色素の薄い髪を揺らし、盛大にため息を吐くところらに頭を下げる。

「すまん」

「別に。それより、無理やり呼び出しておいて謝るところがそこなのかと突っ込みたいね」

子供のやることなんざ気にしないさ。実年齢は私の数百倍なのだが。

「二人だけで会話するなー！」

「ああはいはい。わかったから暴れない」

と、フラン……フランドールを諷める。見た目相応というか、実に無邪気である。中身真っ黒だけど。

「で、フランは何がしたいのよ。あ、決闘はなしで」

「えー？　じゃあ、トランプとか」

トランプか。三人だと人数足りないから門番も呼ぼうか。

「レミアもそれでいい？」

「……まあ、いいさ。暇がつぶせるならそれで」と、いうことでトランプといきましょう。

「……酷すぎやしませんか？　これ」

中華門番、紅美凜が嘆く。

現在大富豪を行っているが、まあ、イカサマ勝負である。

レミリアは能力で確率とか偶然とか操れるし、フランドールは手癖が悪い。私も似たようなもの。

対し美凜は実直というか、そういったことをしない。接待的な面もあるのだから、非常に正直なプレイである。ぶっちゃけ力モ。

「……。それで、美凜は負けたら何をするんだ？」

唐突に口を開いたのはレミリア。美凜があれこれ悩んでいる姿に思うところがあつたのだろうか。

「……へ？」

「ただの遊びではつまらないだろう？」

「そうだねー。罰ゲーム決めとかないと」

レミリアにフランが同調。罰ゲームって……ただのいじめじゃないの？ 部下いびり？

「……れ、レミリア様たちはどうするんです？」

「俺か？ 負けることはまずないだろうが、そうだな。この館にあるものならくれてやるよ。美凜なら、休暇でもいいしな」

「じゃあ、ぼくはお人形あげる。495年前からあるお人形」

怖いよ。フランドール怖いよそれ。

ちなみに負けの基準は最下位であることらしい。勝者は一位の者。私は……どうしよう。べろちゅーとか」

いったら三者とも噴出した。美凜はともかくとして、悪魔がその反応をするのはどうなのよ。

ちなみにファーストキス。やったね野郎ども！

「冗談は置いといてハグでいい？ 見た目だけは美少女だからそれなりに役得だと思うよ」

スタイルもいいよ。中身が残念だけどね。

「……夜月、あんまりそういうこと言わないように」

「そういうのは大切な人とかかやつちゃ駄目だよ！」

おいなんだ。悪魔がどうしてそんな真面目な価値観を持ち合わせて

いる。

普通逆だと思っただけだなあ……。そして美凜は赤くなりすぎじゃないかしら。

「それで、美凜はどうするんだ？」

「あー……。えっと、マッサージで勘弁してください」

無難である。というか、私が勝って美凜負けたら美凜役得じゃない？

見た目美少女の体を触れるんだから。まあ、黙っておけばいいかいざとなったら勝たなくてもいいんだし。

結果としては美凜の敗北、私の勝利になっていた。

「ミスした……！」

「夜月、ちゃんと本気でやらなきゃダメだよ？」

「俺の目を誤魔化そうなど十年早い」

「……あれ？ イカサマしてました？」

トランプ（後書き）

なんか、アレ。主人公の容姿は各自で連想してください。

キーワードは 美少女 スタイル良し 黒髪 で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3038ba/>

東方反幻想

2012年1月9日21時46分発行